耕起される風景、建築の根っこを掘り起こす

Tilling Landscapes: Archē in Architecture

｜風景耕起者宣言｜

土地に寝転ぶ、そこに建築はすでにはじまっている。
だから風景を耕起せよ、どう生きるかから考えるために。

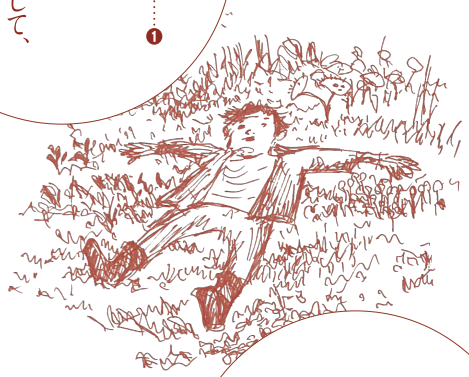
風景は、目に見えるもの（visible）と目に見えないもの（invisible）との関わりによってできている。いずれも、その土地に生きる人たちが、環境と手を取り、生み出してきたものだ。だから、この先の風景を考えることは、私たちがどう生きるかを考えること、そのものだ。人間は機能的な計画と技術の進歩によって、生きられる場所の幅を拡げてきた。そして、地理的な条件から解放された。それぞれの土地で研磨されてきた知恵を借りずとも。こうして、生きるを場所と時間から切り離し、結果、自ら風景を均質にしてきた。近代化がなし得た均質化は、生きられる場所を新たに生み出すうえで必要なことだったのだ。しかし、本当は同じにしないほうがいいものまで、同じにし、風景の見えない部分を、固いアスファルトに閉じ込めてしまったのではないか。いま目指すべき豊かさは、この下に埋もれているのではないか。
だからこそ、耕起しよう。風景の見えない世界を掘り返し、どこに、どう生きるかに向き合うために。アスファルトを掘り返して、土に空気を含ませる耕起者になろうではないか。

風景を耕す、その悦びに満ちた行為から建築をはじめよう。

コンセプト

建築は、目に見えるものによって成り立つため、第一に敷地があり、そこから地域があり、環境があり、地球があるという広がりを持つ。ヴァナキュラーな建築と言いながらも、不動産というフィジカルなものから逃れられないという矛盾を抱えている。そこで本展では、建てる行為を直接扱うのではなく、おおらかに、そして、たくましく風景を耕起する3組の実践から、近代が築いた豊かさを超えていくような、これからの生き方、建築のあり方を問いかけるものとしたい。それは、建築の中のarchēを探求することである。

風景を耕す姿勢……❶
〈土地に寝ころぶ〉
環境と対話して、風景を受け止める。



1）里山制作団体つち式
奈良県宇陀市大宇陀

200年をかけて多種の息づく里山を育む活動を展開する。
その一環として、棍棒の製造・展示、
棍棒飛ばし大会の開催を行い、
スポーツの力で風景を耕している。

風景を耕す姿勢……❷
〈別の世界に組み立てる〉
課題を思いながら、ファンタジーに昇華させる。

風景を耕す姿勢……❸
〈見えない世界を掘り起こす〉
見える世界を意識しつつ、土地を耕して空気をたっぷり含ませる。

風景を耕す姿勢……❹
〈合理的だが無駄がある〉
差し当たって必要ではないもの・ことの存在を認める。

2）のがし研究所
石川県輪島市三井

自然や人々の生き方に学び、
共有の場を科学的かつ詩的に創造する。
そこで得た人を含めた生物の生きる知恵を
「のがし」に加工し、
スイーツの力で
風景を耕している。

3）銭湯山車巡行部
東京都文京区

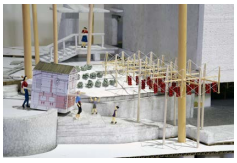
都市に住む人の生活を建築的視点から
発見・記録し、その価値を発信する。
特に、東京下町の社交の場となってきた銭湯の廃材を、
山車につくり変えて町で曳き回し、
祭りの力で風景を耕している。

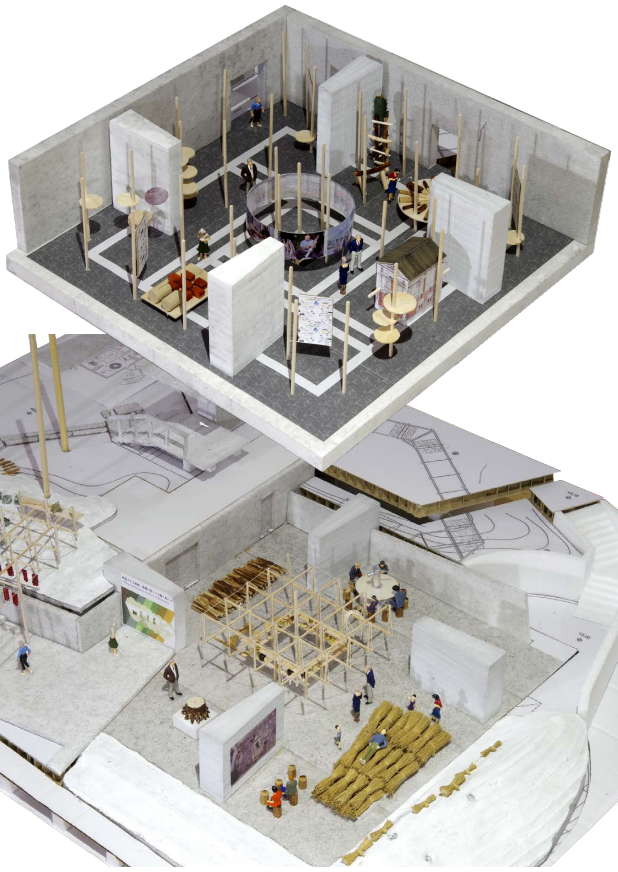
風景を耕す姿勢……❺
〈生命を尊いものととらえる〉
様々な「生きる」が交差する世界を喜ばしく思う。

風景を耕す姿勢……❻
〈態度ははがらか〉
複雑なものを内に秘めつつ、態度は気持ちよく楽しい。

｜会場構成｜

風景を耕す彼らの活動はサイトスペシフィックでありつつ、そのいかなる場所、いかなる国にも飛び火し、別のプラットホームをつくりうる普遍性を秘めている。そこで会場デザインは、フランス/チリ/日本の複数のナショナリティからの目で堀り下げる。フランス人のイザベル・ダイロンは底層に隠れている物事の本質を、写真を交えたドローイングで解きほぐす。澤崎賢一は映像で、人間の目のみならず自然の視点も取り入れながら、目の位置を変える。そして日本人とチリ人により構成されたエフェメラル・リサーチが展示としてまとめあげる。展示では、日本館そのものを風景の構造に見立てる。下層のピロティを目に見えないもの（invisible）、上層の展示室を目に見えるもの（visible）と設定する。下層に出展作家の暮らしの品々や材料を配し、展示の制作過程の映像も投影。上層ではセンターサークルを中心に、出展作家の作品と映像を分散して配置する。センターサークルには3組の活動を一枚の絵巻物としたイラスト等で風景を耕す姿勢を示す。そして上層と下層とをつなぐ階段横の植栽桝では、土を耕し、イタリアの暮らしに役立つ植物を育て本展のコンセプトを分かりやすく体現させる。また、上下層を貫く展示室の穴を什器により連結させることで、見える世界と見えない世界の結びつきを表現する。

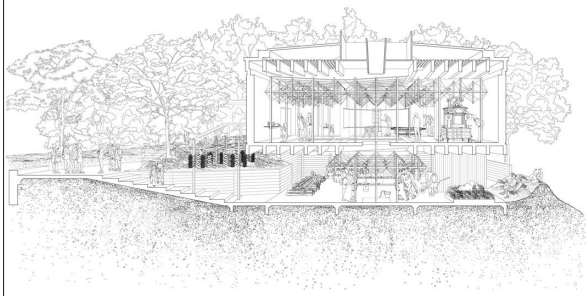


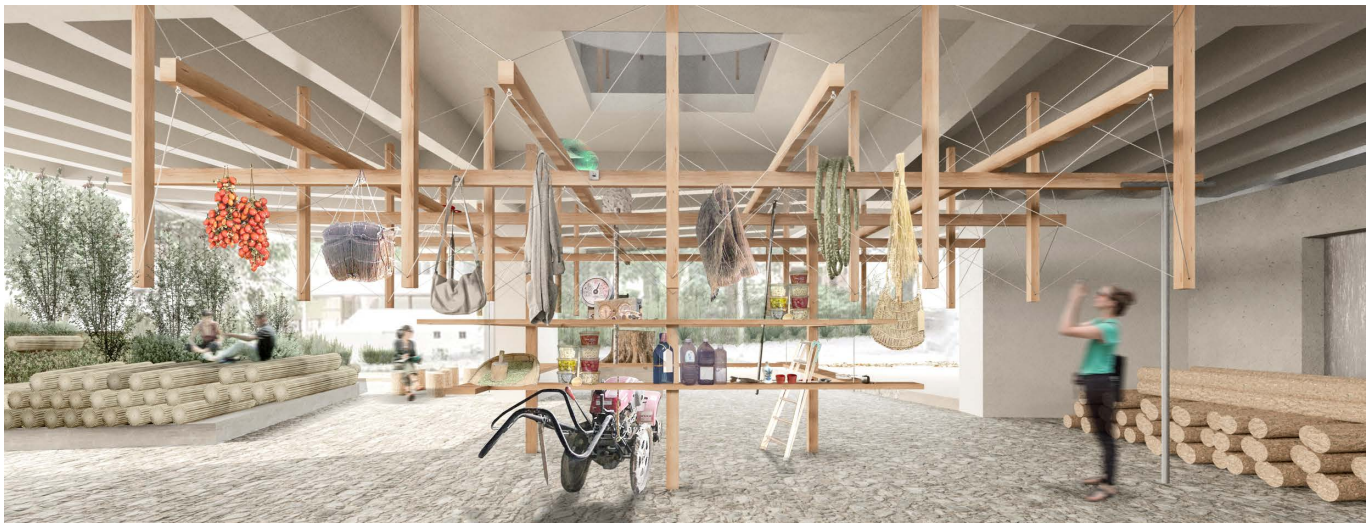


イラストレーション
Isabelle Daëron

映像
澤崎賢一

展示デザイン
エフェメラル・リサーチ





｜展示プロセスとチーム構成｜

展覧会の開催にあたり、以下の４点を意識して展示を実現させる。

［リサーチ……**風景の現場に行く**］
3組の風景の耕し方を、会場の表現に関わる建築家とデザイナーとでリサーチをし、イラストレーションと展示デザインに反映させる。

［書籍……**言葉で伝える**］
本展のコンセプトや各アーティストの背景を伝える媒体として、会期前に書籍を刊行する。
展覧会場でも販売することで、展示空間での解説の冗長さを回避しつつ、観覧者により深い理解を促す。

［展示空間……**軽やかに施工する**］
展覧会のコンセプトにも合ったテンセグリティのシステムを採用し、部材も少なく、また短い施工期間も実現する。
輸送前に日本で概ね加工は完了させ、現地ではみなで立ち上げる。

［ワークショップ……**畑と人を結ぶ**］
会期中、展覧会のコンセプトを伝える場として畑に関わるワークショップを開催する。
ワークショップはヴェネツィア大学大学院で有用植物について研究をする高橋未央がコーディネートする。

［チーム構成］

キュレーター
惠谷浩子（奈良文化財研究所）

ディレクター
本橋 仁（金沢21世紀美術館）

出展作家
里山制作団体つち式……東 樫、間宮 尊、西田有輝、豊川聡士、磯田和秀
のがし研究所……萩のゆき、萩野紀一郎
銭湯山車巡行部……栗生はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇気

イラストレーション
Isabelle Daëron

映像制作
澤崎賢一（総合地球環境学研究所）

展示デザイン
エフェメラル・リサーチ（Claudio Torres、Yuji Harac
Clarita Reutter、Emile Straub）

植物コーディネーター
高橋未央（ヴェネツィア大学大学院）

アドバイザー
阿部健一（総合地球環境学研究所）
陣内秀信（法政大学名誉教授）

編集者
福田容子（イシス編集学校）

グラフィック・デザイン
西岡 勉（グラフィック・デザイナー）

協力
フィルムアート社
株式会社ドワンゴ

イラスト/taikankun

書籍について
タイトル：耕起される風景、建築の根っこを掘り起こす
Tilling Landscapes: Archē in Architecture
規格：A5判／256ページ
（カラーページあり、日英併記）
発行：フィルムアート社
期日：2025年2月印刷、5月刊行
監修：惠谷浩子、本橋 仁
執筆：阿部健一、陣内秀信、萩のゆき、萩野紀一郎、東 樫、栗生はるか、三文字昌也、高橋未央、福田容子
デザイン：西岡 勉
編集：臼田桃子（フィルムアート社）